

1. はじめに——本文書の位置づけ

本文書は、「ひかりの輪」の現在の状況、特にその宗教的活動に対する私個人の見解を記したものである。

最初に注記しておけば、私はこれまで、オウム真理教に関する研究を手掛け、『オウム真理教の精神史——ロマン主義・全体主義・原理主義』（春秋社、2011年）、『現代オカルトの根源——霊性進化論の光と闇』（ちくま新書、2013年）という二冊の書物を著してきたが、オウム真理教の後継団体の一つである「ひかりの輪」を直接的な研究対象としたことはない。ゆえにこの文書は、「ひかりの輪」に対する綿密な調査や分析に基づく研究文書というよりも、オウム真理教研究の過程で副次的に得られた情報や知見に基づく個人的見解書、ということになるだろう。私自身が「ひかりの輪」に関する知見を得た主な手段を時系列的に列挙すれば、以下の通りとなる。

（1）オウム真理教について研究する際、「ひかりの輪」のホームページに掲載された「オウムの教訓」の内容を参照・閲読した。

（2）会員の一人である宗形真紀子氏が刊行した書物『二十歳からの20年間——“オウムの青春”の魔境を超えて』（三五館、2010年）を閲読した。

（3）『a t プラス13 特集：宗教の未来』（太田出版、2012年）の企画において、代表である上祐史浩氏と、「オウム真理教を超克する」というタイトルの対談を行った。

（4）上祐史浩氏が公刊した書物『オウム事件 17年目の告白』（扶桑社、2012年）、『終わらないオウム』（鹿砦社、2013年）、『危険な宗教の見分け方』（ポプラ新書、2013年）を閲読した。

（5）上祐史浩氏、広末晃敏氏、宗形真紀子氏と個人的に面談し、「ひかりの輪」の現状に関する説明を伺った。特に宗形氏には、私からの質問に対して詳細に返答していただいた。

（6）「ひかりの輪」の外部監査委員長を務める河野義行氏と個人的に面談し、同委員会設立の経緯や、「ひかりの輪」に対する見解を伺った。

（7）2007年5月の立ち上げ以降、「ひかりの輪」が使用してきた教本類のデータを、現在は使用していないものも含めて提供していただき、それらの全体に目を通した。

本文書は、「ひかりの輪」の外部監査委員長である河野義行氏からの依頼に基づき、同団体に対する外部監査の一環として作成されたものである。私としては、未だ「ひかりの輪」に対する十分な知見や情報を得ていないことに対する危惧の念がないわけではなかったが、現状において、同団体と直接的にコミュニケーションを取っている研究者が少数に留まること、また取り分け、河野義行氏が、オウム事件の最大の被害者の一人でありながら外部監査委員長に就任され、オウム問題の解決に向け、「ひかりの輪」と一般社会のあいだに立ってご努力されて

いることを知りながら、今回の依頼を固辞することは、道義的に許されないと考えた。河野氏の献身的なご努力に対しては、ここで改めて、心よりの敬意と謝意を表しておきたい。

2. 「ひかりの輪」の宗教的活動には、オウム真理教と同様の危険性が存在するか

平成11年に制定された団体規制法（正式名称：無差別大量殺人行為を行った団体の規制に関する法律）においては、オウム真理教が引き起こしたような無差別大量殺人を二度と繰り返させてはならないという趣旨から、オウム真理教とその後継団体（具体的には「アレフ」および「ひかりの輪」）のあいだに、さまざまな点における同一性が確認された場合、同団体に対する観察処分が適用されると定められている。そして「ひかりの輪」は現在、同法に基づき、公安調査庁による観察処分の対象となっている。

私はあくまで、客観的かつ中立的な立場にある研究者の一人に過ぎないため、同法の制定や運用をめぐる是非に関して、個人的な見解を表明することは控えたいと思う。ここで私が論じることができるのは、そもそもオウム真理教は、どのような教義や世界観を備えていたがために無差別大量殺人を犯すに至ったのか、また、オウム真理教のそうした要因に対して、現在の「ひかりの輪」がどのような見解や態度を保持しているのか、という事柄に関してである。

周知のようにオウム真理教は、仏教、ヒンドゥー教、仙道、キリスト教など、さまざまな宗教に由来する観念を折衷的に組み合わせることによって、自らの教義を作り上げていた。そして後に述べるように、「ひかりの輪」による宗教的活動もまた、顕著な折衷性をその特色としている。そうした点から鑑みれば、オウム真理教と「ひかりの輪」の双方に存在する多様な教えや実践において、たとえ部分的な共通性・類似性が見られたとしても、それをもって両者が同一である、さらには、両者とも危険な団体であると結論することは、端的に誤っていると言わなければならない。論理的に考えるなら、まず問題としなければならないのは、折衷的な教義のなかのどのような要素が、テロリズムに繋がるような危険性を孕んでいたのか、ということであろう。

それでは、そもそもオウム真理教は、どのような教義や世界観を備えていたがために、無差別大量殺人を犯す危険な宗教団体となったのか。私の考えではそれは、特に次の三点に集約される。すなわち、（1）人類を「霊的に進化する人々」と「墮落して動物化する人々」に二分する世界観と、それに基づく陰謀論の提唱、（2）麻原彰晃への絶対的帰依を求める「グルイズム」、（3）人間の魂の行方をコントロールしうるとされる「ポア」の技法、である。以下ではこの三点について、順次論じる。

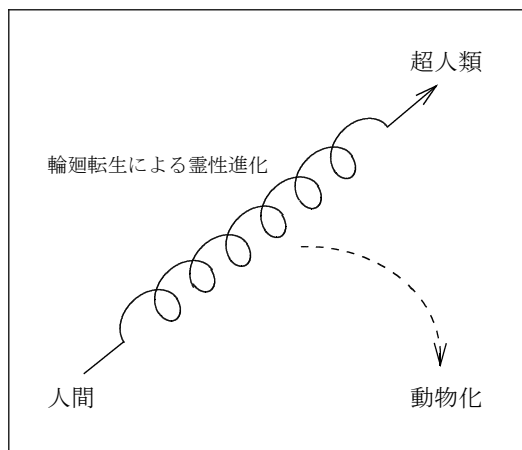
（1）人類を「霊的に進化する人々」と「墮落して動物化する人々」に二分する世界観と、それに基づく陰謀論の提唱

先述したように、オウム真理教は表面的には、折衷的に組み上げられた複雑な教義を特色とするが、その根幹部分に着目すると、実はきわめて単純な世界観に立脚していることが分かる。上祐史浩氏は私との対談において、それを次のように表現している。

「八八年がひとつの転機だったとすれば、それは麻原の考えのなかに、普通に人類を救済する

のではなく、「人類の種の入れ替え」を行うという考え方が出てきたからです。これは、修行をせず悪業を積む大半の普通の人たちを滅ぼしてしまい、修行をして善業を積む者たちのみの国をつくるという意味だったのです。」 (『a t プラス』13号、二六頁)

すなわち、麻原彰晃の考え方によれば、人間は、「修行をして善業を積む者たち」と、「修行をせず悪業を積む大半の普通の人たち」に二分される。オウム真理教はかつて、山梨県上九一色村を中心に「サティアン」と呼ばれる施設群を建設し、信者たちを苛烈な修行に従事させる一方、70トンという大量のサリンの製造を計画していたが、それは最終的には、「修行をして善業を積む者たち」の育成と、「修行をせず悪業を積む大半の普通の人たち」の粛清を目標としていた。オウム真理教による二つのサリン事件、すなわち、松本サリン事件と地下鉄サリン事件は、直接的には教団を防衛することを目的として実行されたと考えられるが、そもそもオウムが大量のサリンの開発・製造に着手した動機には、このような世界観が背景として存在していたということに注目しなければならない。



オウムにおける二分法的人間観
(『現代オカルトの根源』一七頁の図を改変)

オウム真理教における二分法的世界観の内実について、より具体的に記そう。一般信者や社会全体に対して公言されていたように、オウム真理教の目標は、ヨーガや密教の修行の実践によって人々を霊的に進化させ、「超能力者」を輩出すること、ひいては、超能力を備えた「新人類」によって構成されるユートピア国家を建設することに置かれていた。麻原彰晃は、1986年に公刊した彼の処女作『超能力「秘密の開発法」——すべてが思いのままになる!』(大和出版)の末尾において、すでにそのことを次のように論じている。

ごくふつうの人間が、超能力修行によって次々と超能力を獲得し、神々に近くなっていく。これは別にSF小説の話ではない。すでに現実化しているのである。そして、具体的な手段が本書に示されているわけである。(中略)超能力を持ち、それと同時に霊的に進化し、精神と肉体の向上を果たした新人類の時代がやって来るのではないかと考えているのである。その時代は、すべての調和がとれていて、美しく平和であるに違いない。

(麻原彰晃『超能力「秘密の開発法」』一九九～二〇〇頁)

広く知られているように、初期のオウム真理教は、「空中浮揚」に成功したと喧伝することによって多くの信者を集めたが、修行の成果として得られる「神秘体験」や「超能力」を宗教の本質とする考え方は、その後も維持され続けた。なかでも、教祖の麻原彰晃は「最終解脱者」「真理の御魂^{みたま}」と称される卓越した人間であり、信者たちは彼をグルとして仰ぎ、献身的に帰依・修行することによって、自らの過去の悪業を清算し、霊的に進化しようと考えられたのである。

しかし他方、オウムの見方によれば、現在の人類のすべてが、「霊の進化」の道を歩んでい

るわけではない。そうした人々はむしろ少数派であり、大半の人々は、物欲に溺れることによって自身の霊を退化させ、「動物化」していると考えられた。麻原彰晃はある講話において、そのことを次のように表現している。

今の人間というのは、動物以下だと私は思っている。ものすごい数の生き物を殺していると。ものすごい数の嘘をついていると。一体どっちが救済として正しいんだと。(オウム^の活動は) 仏教的な行き方というよりも、むしろ救世主的な行き方というのかな、管理する側の行き方というか、そういう行き方になるだろう。つまり今の人間が動物化した以上、あるいは動物以下になった以上、それをコントロールしなきゃならない。

(NHKスペシャル『未解決事件File.02 オウム真理教』より)

このようにオウムの世界観は、修行を積んで「霊的に進化する人々」と、物欲に溺れ「墮落して動物化する人々」という二分法によって形成されていた。そして、特に後者に関しては、ある「秘密結社」がその動向を促進・管理していると唱えられた。すなわち、「ユダヤ=フリーメイソン」と呼ばれる秘密結社である。麻原の説法によれば、金融・メディア・教育・政治などのあらゆる分野が、密かにフリーメイソンによってコントロールされており、その影響から一般社会の人間たちは、食欲・性欲・暴力といった物質的欲望に縛りつけられている。そして彼は、フリーメイソンの計画は近い将来に完成し、そのとき日本人は「家畜」として洗脳支配されるようになる、という危機感を煽ったのである。元信者の一人は、当時のオウムの考え方について次のように記している。

もし日本全土がフリーメイソンに支配されたら大変なことになります。フリーメイソンは、人々の性欲を高めさせ、人々に快楽を覚えさせます。あるいは人々にスポーツをさせて無智にさせます。あるいは映画や刑事ドラマの中で、人を殺したり人に暴力を加えるシーンを見せて、人々の邪悪心を育てようとしているのです。こうして貪瞋痴^{とんじんち}(むさぼること、怒ること、無智なこと)の煩惱をかりたて、人々を三悪趣(注：輪廻における地獄・畜生・餓鬼の三世界)に向かわせようとしているのです。だから我々はフリーメイソンの野望を阻止しなければならないのです。(中略)フリーメイソンが日本を支配すると、一人一人がバーコードを額にうちこまれて、完全にコントロールされてしまうのです。こんなフリーメイソンに日本を占領させるわけにはいかないから、私たちは戦わなければならないのです。フリーメイソンと戦って勝利しなければならないのです。

(田村智『麻原おっさん地獄』一八二～一八三頁)

きわめて荒唐無稽に思われるかもしれないが、ユダヤ=フリーメイソン陰謀論こそは、オウム真理教を暴走させ、無差別テロにさえ踏み切らせることになった主要な原因の一つであった。実にオウムにおいては、教団がフリーメイソンの支配計画を知り、それに抵抗していることから、フリーメイソンのコントロールを受けた米軍による「毒ガス攻撃」が開始されている、と信じ込まれていた。ある意味で、サリン製造を含む教団の武装化は、フリーメイソンの攻撃に対する防衛・抵抗として着手されたのである。ハンナ・アーレントの『全体主義の起原』、ノーマン・コーンの『ユダヤ人世界征服陰謀の神話』といった古典的研究書にも記されているように、ユダヤ陰謀論は、ナチズムによるホロコースト(ユダヤ人大量殺戮)の引き金ともなっ

た思考法であったが、オウムもまた、その幻想に取り憑かれていたということになる。

このように、オウムにおける暴力性の根源には、人間を「霊的に進化する人間」と「墮落する人間」に区別する二分法的世界観、さらには、それに基づく陰謀論が存在していたわけだが、翻って現在の「ひかりの輪」では、こうした観念が何らかの仕方では残存しているだろうか。

まず結論から言えば、そのような形跡は見当たらない。同団体の思想においては、二元論を乗り越え、「万人万物が輪のように一体」であることが強調されているが、これは具体的には、オウムにおける二分法的人間観が無差別大量殺人に繋がったという自覚と反省の上に提唱されたものと理解することができる。上祐氏の著作には、次のような記述が見られる。

（「ひかりの輪」では）ヨーガ・仏教の教えを改めて解釈し、「万物を一体平等」と見る一元論的思想を強調した。これを「輪の思想」と呼んでいる。これは、麻原の善悪二元論の過ちを超えるものであり、具体的には、万物を仏の現れとして平等に尊重し、万人・万物が繋がって一体であるという思想である。さらに、一人一人の中の神聖な意識が、いわば神仏であり、外側の存在は、仏陀やイエスであろうと、仏像であろうと、唯一絶対のものではなく、それらは自分の神聖な意識を引き出すシンボルであって、人によって違ってよいという思想を提唱した。これは、グルイズムも、偶像崇拜もしない考えであり、宗教間の対立を超えるものだ。

（上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』二二二頁）

後述するように、私自身は、果たして上祐氏の唱える一元論の思想が、かつてのオウムに見られたような二元論的思想を根底的に乗り越えるものなのか、ということについて幾分懐疑的なのだが、取りあえずそのことは措こう。差し当たり重要なのは、現在の「ひかりの輪」において、理不尽な惨劇を生み出すに至ったオウムの思考法や世界観に対する明確な反省・考察が行われ、その上で、そこからの脱却が図られているということである。

陰謀論の害悪や危険性についても、一般社会の認知が未だ進んでいるとは言えない状況に比して、上祐氏はすでにそれを十分に理解している。『オウム事件 17年目の告白』には、随所に陰謀論に関する記述が見られ、それが常にオウムの暴走を促進してきたということが強調されている。一例として、次のような箇所がある。

『サンデー毎日』への対応策を話しているとき、印象に残っている麻原の言葉がある。私が麻原に対して、「週刊誌の批判は過激な出家制度が原因なのでは？」と尋ねたとき、麻原はめったに見せない不満げな表情で、こう言ったのだ。「それは、あちら側のシナリオだ。」この麻原の言葉には補足説明が必要だろう。「あちら側」とは、教団を弾圧する国家権力＝フリーメーソン側という意味である。「シナリオ」とは、麻原独自の考えで、教団を弾圧する側がある種の「計画」を持って、教団を弾圧して社会を動かしているという見方のことを意味していた。しかし、麻原は自分の預言を実現するために、教団の軍事力を形成しようとしていた。だから今思えば、彼がよく口にする「国家権力による陰謀論」は、自分の心の投影だったに違いない。

（上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』六〇頁）

陰謀論はしばしば激しい暴力性や攻撃性と結びつくが、すでに述べたようにそれは実際には、単なる「暴力」や「攻撃」ではなく、「防衛」や「抵抗」を意図して行使される。というのは

陰謀論者は、根拠を欠いた純粋な想像力によって目に見えない「外部の敵」を作り出し、そうした敵によって、すでに自らが「迫害」を被っていると思いつまからである。上祐氏の記述は、麻原の思考における陰謀論的幻想の振幅のなかで、次第に暴力性が昂進していく様子を的確に捉えていると見ることができるだろう。

ゆえに管見の限りでは、「ひかりの輪」が再び陰謀論的幻想のメカニズムに落ちこんでいくという危険性も、現状ではすでに存在しない。オウム問題の全体に関して付言すれば、むしろ懸念されるのは、「ひかりの輪」以外のところで、オウムによって開始された陰謀論の連鎖の残存が見られることである。

日本社会では現在、オウム真理教は実は、ロシアや北朝鮮の傀儡として作られた教団であり、地下鉄サリン事件は、これらの国家が目論んだ「間接的侵略」であった、とする陰謀論がまことしやかに流布されている。しかしながら、オウム真理教の思想や世界観を鑑みれば、同教団がロシアや北朝鮮の傀儡として行動するということはまったく考えられず、また、こうした憶測の裏づけとなる証拠は何一つ存在していない。『オウム事件 17年目の告白』の末尾には、有田芳生氏との「検証対談」が掲載されており、そのなかでは、オウム事件にまつわる陰謀論について議論されている。やや長くなるが、重要な箇所なので引用しておこう。

有田 オウムと北朝鮮の関係はどうでしょう？ 2011年の大晦日に平田信が警察に出頭した際にも、「金正日が亡くなったので、北朝鮮として隠しておく必要がなくなったから出頭したんじゃないか」ということを、テロ対策の専門家が本気で言っていた。私自身はマンガみたいな話だと思っているのだけれども、世間にはオウムと北朝鮮を結び付けて、面白おかしく話す人が今でもいます。例えば、早川はロシアに20回以上も行って、その際、ウクライナ経由で北朝鮮に入ったと指摘する雑誌記事もあります。しかし警視庁が確認したら、そういう事実はなかったという。上祐さんは彼が北朝鮮について話すのを聞いたことはありますか？

上祐 それはまったくないです。有田さんが接触している警察は、そういった事実はないと聞いているんですか？

有田 ないと聞いています。パスポートで、ロシアと日本の移動を確認し、そこに北朝鮮に入る隙はなかったと判断したそうです。

上祐 じゃあ、絶対はないですね。私も、警視庁の公安部の担当者に、同じように確認しました。全面否定でした。また、私自身も、早川からただの一度も、北朝鮮の話聞いたことはありません。むしろ、ロシアに来ていた頃の早川は、先ほども言ったように、教団武装化の件で麻原に尻を叩かれていて、本当に泡を食っていました。ロシアの軍用ヘリコプター購入の段取りなどで精一杯で、北朝鮮になんか行っている余裕はなかったと思います。だいたい外国政府と人脈を作るのは本当に大変だし、北朝鮮に行ったところで、手に入るものはロシア製の兵器しかないでしょう。反対にロシアには、国軍のトップである安全保障委員会の書記まで務めたロボフという頼りになる人間がいた。ロシアで手に入るものを苦労して北朝鮮から調達するなんて、まったく合理性がないでしょう。

有田 北朝鮮のチュチェ思想研究会にいた日本人がオウム信者になっていて、その人物が北朝鮮の職員だということをする人もいます。

上祐 そういう左翼系の方が、少数ながら教団に入ってきていましたけど、そこで北朝鮮と組織的に繋がったということは絶対はないです。第一、麻原は自分がキリストになろうとしてい

たわけで、誰かと組むなんてことは考えていませんでした。ましてや、オウムがロシアや北朝鮮にコントロールされる、傀儡になるなど、空理空論です。

麻原の預言の教義では、自分達が一番であり、米国もソ連・ロシアも、他国は、獣の国とか、悪の国として見下し、信用していないのです。ロシアを上手く騙して利用することはあっても、対日本のテロのために、手を組むとか、その配下に回るなどは、教義に反しています。まして北朝鮮などは、到底考えられない。

しかし困ったことに、その説をすっかり信じ込んでいる人はたくさんいますね。先日、テレビ番組に出た際にも、ほかの出演者から「お前はロシアと北朝鮮について、まだ話していないことがある」と言って怒られてしまいました。話せと言われても、こればかりは何もないので、ほとんど困りました。それだけでなく、そういった陰謀説が広まると、陰謀説を唱えているアレフを助長するので、心配しています。

(上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』二九二～二九四頁)

オウム真理教のケースを含め、20世紀後半の日本では、ユダヤ陰謀論がしばしば社会的なブームを起こしたが、今世紀に入ると、その動向は次第に下火になった。ところが今日では、ユダヤ陰謀論の欠を埋めるかのように、朝鮮系の陰謀論が世の中に蔓延し、オウム事件に対しても、そうした枠組みから「真相が語られていない」と吹聴されるようになったのである。ここには、自分はオウムを批判している、オウム問題の真相を解き明かそうとしている、と思っている人々が、実は根深く「オウムの思考回路」に呪縛されている、という奇妙な構図がある。また、上祐氏が指摘するように、このような憶説を無責任に流布させることは、未だに陰謀論を手放していないアレフの布教活動を後押しする結果に繋がるということを、われわれは銘記すべきであろう。

(2) 麻原彰晃への絶対的帰依を求める「グルイズム」

以上のように麻原彰晃は、墮落した魂の持ち主を肅清するために、そして、ユダヤ＝フリーメイソンに支配された日本を壊滅させるために、サリン製造を始めとする教団武装化を遂行した。こうした行為が現実的に可能となったのは、信者たちが「尊師」麻原の意志に全面的に服従するという体制が整えられていたからである。こうした体制は現在、「グルイズム」と通称されている。

オウム真理教におけるグルイズムの直接的な出所は、チベット密教の修行法、より具体的には、宗教学者の中沢新一が1981年に公刊した『虹の階梯——チベット密教の瞑想修行』(平河出版社)という書物にある。この書物では、「心の本性」に到達することを目的とした密教の修行法が段階的に説明されるのだが、そのなかでも取り分け目を引くのは、グルに対して純粋な心で帰依する必要性が繰り返し説かれていることである。導師となる人物が、仏教者であるにもかかわらず平気で殺生を行っていても、それを理由として、彼を師として不適格であると判断してはならない。導師は弟子に対して、暴力や虐待とも思えるような厳しい仕打ちをすることがあるが、こうした修行を避けてはならない。なぜなら、「心の本性」に到達するための修行においては、自我や自意識を捨て去ることがもっとも肝要となるからである。『虹の階梯』には、次のような一節がある。

さて、ありきたりの考えにしばられていれば、狩人みたいに生きものを殺したり、生きた魚を火にあぶる行者などに出くわしたら、眉をひそめ退散することだろう。しかし、成就者たちはしばしば人の理解を絶した力をふるうものだ。だから、何よりもうぬぼれや奢りを捨て、自分をむなしくして、純粋な心で相手を見つめていなければいけない。そうしなければ、せっかく精神の導師たるべき人が目の前にいても、それに気づかずに終わってしまうだろう。とにかく自分の導師を探しだしたいのなら、ありきたりの考えにしばられていてはだめだ。こうして求めるラマにめぐりあうことができたなら、ラマに自分のすべてを投げだすような純粋な信頼を託して、その教えのすべてをまるで瓶の水をそっくり別の瓶に移し変える気がまえで学びとって行くのである。ラマの心を自分の心の連続体にまるごと移してしまうような気持ちで、その教えに向かわなければいけないのだ。（ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』一四七頁）

麻原彰晃は、渋谷にヨーガ教室を開いていた1983年頃から、『虹の階梯』の読書会を行っていたと言われている（井上順孝編『情報時代のオウム真理教』二三頁）。すなわち、『虹の階梯』はオウムに対して、その最初期から大きな影響を与えたのである。修行においてグルに徹底して帰依しなければならぬということは、教団の規模が拡大し、麻原が教祖としての絶対的な地位を確立していくと、隔々にまで浸透・徹底させられた。それは最終的に、「金剛乗（ヴァジラヤーナ）」あるいは「秘密真言金剛乗（タントラ・ヴァジラヤーナ）」と称される教えの重要な前提を形成したのである。麻原はヴァジラヤーナについて、次のように規定している。

金剛乗の教えというものは、もともとグルというものを絶対的な立場に置いて、そのグルに帰依をすると。そして、自己を空っぽにする努力をすると。その空っぽになった器に、グルの経験、あるいはグルのエネルギー、これをなみなみと満ち溢れさせると。つまり、グルのクローン化をすると。あるいは守護者のクローン化をすると。これがヴァジラヤーナだね。（中略）そしてあなた方、わたしの弟子は激しい修行によって自己を空っぽにし、グルだけを意識することによって、グルの神聖なエネルギーをあなた方に注入されると。それによってあなた方は靈性の向上を行なうと。（麻原彰晃『ヴァジラヤーナコース 教学システム教本』第二話）

オウムによる殺人はもっぱら、「自己を空っぽ」にしてグルの意志に従うこと、さらにはそのグルが、魂の行方をコントロールする「ポア」と呼ばれる技法を身に付けていることを前提に実行されたのだが、後者については後に触れよう。グルを守るため、あるいは教団を守るためであれば、どのような行為にも手を染めるといったオウム信者の言動は、一般社会に大きな驚きを与えたのだった。

それでは、現在の「ひかりの輪」では、依然として麻原彰晃に対するグルイズムが維持されているだろうか。ここでも端的に結論を言えば、それはすでに、完全に放棄されている。まずグルイズムの修行法全般に関して、上祐氏は私との対談において次のように述べている。

私が麻原信仰を脱却する上で理解したことは、こうしたグルイズムが健全に機能するには、重要な前提条件があるということです。それは、このチベット密教の教えは、あくまで精神的

な修行のための手段であって、グルという存在が本当に絶対・完璧だと主張しているわけではないということです。他人に対して批判的であれば、自分の欠点が見えにくくなることがあるため、謙虚に自分のエゴを見つめるために、「仮に」グルを絶対と設定するのです。(中略)グルが指示しても、当然サリンを撒いてはいけませんし、法律の範囲内で、第三者を巻き込まずにやらないといけない。オウムの場合でいえば、麻原に「サリンを撒け」と命令されたときに、「それは、グルを(仮に)絶対と見なす教えの主旨から逸脱しています」といわなければならなかった。

このように、グルを絶対視するのは仮の設定にすぎないことを理解した上で、自我執着を薄める仏教的な瞑想を事前に十分に行なっておくことが、グルイズムの修行が大きな問題を起こさないための必要不可欠な条件だと思います。とはいえ、宗教的に有意義なグルイズムの修行ができるような指導者と弟子がいま現在の日本に存在するかは、非常に疑問です。わけがわからず、混乱する可能性が高い。それゆえにひかりの輪では、この修行法は採用していません。

(『a t プラス』13号、二四頁)

また同時に、麻原彰晃を「神の化身」や「救世主」として崇拝し、その意志を実現しようとする目標も放棄されている。もっとも明示的な証拠としては、「ひかりの輪」ではオウム問題の解決に向け、麻原の死刑を可能な限り早期に執行することを求めていることが挙げられるだろう。麻原の処刑を含むオウム問題解決への道筋については、次のような発言が見られる。

大田 そのような状態のなかで麻原死刑囚の死刑が執行された場合、キリストの事例が想起され、「人々の罪を背負って悲劇の死を遂げた麻原」という神格化がかえって進んでしまう恐れもあるのではないのでしょうか。

上祐 その可能性は少ないと思います。麻原自身は、自分が「死んで復活する」とはいったことがありません。また、キリスト教信者が信じるイエスの復活については、幻想・魔境だと批判しています。

むしろAlephには、仏陀が入滅したときの説話から、信者が麻原を求める帰依の心が弱いと、麻原は死刑になってしまうという考えがあります。麻原が死刑になるかどうかは、司法機関ではなく、自分たちの帰依に応じた麻原の神秘力で決まると考えられているのです。

Alephが新たに勧誘している人のなかで、教団に疑問を持って私たちに相談に来た人によると、麻原の死刑が噂された去年の末ぐらいから、いっそう麻原への帰依を深める指導がなされたとのことです。その後、平田の出頭と麻原の死刑の延期がありましたが、彼らはそれを信者の帰依によるものと考えて、悪い意味で盲信を深めた可能性があります。

理想的なのは、麻原が生きて、反省し、自分で信者の呪縛を解き、賠償を呼びかけることですが、それは現実的ではない。しかしこのまま死刑を延期すれば、逆に信者が盲信を深め、ますます新しい信者を増やす恐れがあると思います。

一方、Alephのなかでは、麻原はすでに絶対化されており、麻原の死刑でそれが変化するとは思えません。彼らの道場ではいま、すでに「尊師はここ(=道場)にいらっしゃる」と指導されているそうですから。

とはいえ、麻原の死刑に付随する危険性があるとすれば、可能性は低いと思いますが、信者の自殺だと思います。Alephを裏で支配しているのは、麻原の家族ですが、かつて、麻原の娘

のひとりが、「尊師が死んだときにあとを追うのは、尊師の教えに反しない」と語ったこともあります。そして、麻原が翻訳・解釈したノストラダムスの予言のなかでは——麻原がキリストなのですが——キリストが多くの弟子だちと一緒に死んだ状態で見つかるという解釈できる内容のものがあります。よって、可能性は低いと思いますが、こうした解釈が、集団自殺を正当化する懸念もないことはない。

だから、理想的なのは、なんらかのかたちでAlephを解体してそういった指示が出せないような体制を整え、そのあとで刑を執行することだと思います。

（『a t プラス』13号、五～六頁）

麻原が抱いていた究極的なヴィジョンは、現在の日本国を崩壊させ、新たに「真理国」と呼ばれるユートピア国家を建設し、自身がその王として君臨することであった。「ひかりの輪」に対しては現在も、依然として麻原の影響下にあるのではないかと、最終的には麻原の意志の実現を目指しているのではないかと、という疑念がしばしば掛けられているが、麻原の死刑が執行されてしまえば、その意志を実現すること自体が、根本的に不可能となってしまうだろう。「ひかりの輪」が、残るオウム裁判の進行やアレフ対策に協力していることを考え合わせても、そうした疑念は合理的な根拠を欠いていると思われる。

加えて、しばらく前まで「ひかりの輪」は、「大黒天」や「三仏（釈迦・弥勒・観音）」を宗教的シンボルとして用いていたのだが、公安調査庁はこれらを、麻原彰晃に対する崇拝が形を変えて（偽装されて）維持されているものと見なした。確かに、このような解釈を引き寄せてしまう余地が少なからずあったとはいえ、「ひかりの輪」の宗教的見解の変遷をアレフ時代まで遡って時系列的に振り返ってみると、そうした主張もまた、事実を正確に捉えたものとは言い難い。それについて、以下にやや詳しく論じる。

まず、広く知られているように、かつてのオウム真理教においては、麻原彰晃が「シヴァ大神の化身」と捉えられていた。「シヴァ大神」とは、ヒンドゥー教における破壊の神・シヴァ神と麻原を融合させたオウム真理教独特の神格であり、この世に終焉をもたらす存在と考えられたのである。麻原信仰と終末論は、オウムにおいて密接に結びついており、その影響力は、地下鉄サリン事件以後も存続した。上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』、宗形真紀子『二十歳からの20年間』の他、野田成人『革命か戦争か——オウムはグローバル資本主義への警鐘だった』（サイゾー、2010年）といった著作には、いわゆる「ノストラダムスの大予言」によって指定された1999年まで、多くの信者たちが「ハルマゲドン」の勃発を信じていたという状況が詳しく描かれている。

しかし、1999年が大過なく過ぎ去り、2000年代を迎えると、予言が外れたことが次第に明確となり、教団の内部では「麻原彰晃＝シヴァ大神」への信仰が動揺し始める。上祐氏が刑期を終えて出所し、教団に復帰したのもその時期（1999年12月29日）であった。そして以降の教団は徐々に、すべてを「陰謀」と捉えて麻原信仰に固執しようとする信者と、社会との融和という現実路線を選択し、麻原信仰から離脱しようとする信者の二派に分裂していくことになった（結果的にはそれらの流れが、現在の「アレフ」と「ひかりの輪」となる）。2000年当時の教団の状況を、上祐氏は次のように振り返っている。

信者の多くが麻原の預言を信じ、社会と対立する方向に動いていた。そのため、私は教団全体

に、「預言は絶対視できない。麻原は全知全能ではない」と話した。私の言葉にショックを受けた幹部がいたが、現実には預言は成就していなかったため、ある程度は受け容れられた。しかし2000年当時の教団では、麻原信仰を払拭する発想は私を含め、誰一人持っていなかった。どの程度、麻原への信仰を目立たせなくするか、麻原と距離を取るかが焦点だった。結果として、①麻原と教団の事件への組織的な関与を含め、謝罪して賠償をする。②麻原の写真や祭壇から外し、シヴァ大神の絵を中心に据える。③事件の原因となった危険な教義は否定・排除する。④教団の名前を「オウム真理教」から「アレフ」に改める。という方針が決まり、2月4日、マスコミに発表した。（上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』一七七～一七八頁）

2000年から「ひかりの輪」設立前年の2006年まで、上祐氏とその支持者（「代表派」や「M派」と呼ばれていた）のあいだでは、未だ麻原＝シヴァ大神信仰の呪縛が強く残存しながらも、そこから離脱するための道が模索されることになる。2002年頃から教団では、現在も続く日本の「聖地巡礼」が開始されるのだが、宗形真紀子氏はその体験から、シヴァ神に対する理解が少しずつ変容していったということを記している。

「御柱祭」で有名な諏訪大社を訪れ、御柱を見学したときは、近くの博物館で、その御柱祭とシヴァ神を祀るネパールや世界各地の神柱のお祭りがとても似ていることを知って驚きました。当時、オウムで主宰神としていたシヴァ神の信仰をもとにしたお祭りが、ネパールや日本で同じような形態で行なわれているのなら、世界の信仰や文化は根底でつながっていて、一つの信仰が世界各国の文化に合わせて少しだけ形を変えているように思えました。

東北にあるストーン・サークルという縄文遺跡を見学したときには、それがインドにあるシヴァ・リングとよく似ていることを知り、諏訪のときと同じように、インドの信仰と日本の古代信仰がつながっていることに、たいへん興味がそそられました。はるか縄文時代の昔に造られた遺跡が、いったい何を意味しているのかも、とても知りたくなりました。

こういったことから、わたしは、麻原は日本にあるオウム教団だけが「聖」で、他の宗教は「邪」で「外道」と断定していたけれど、世界中の信仰が根底でつながっているのなら、そもそも何か一つの教団だけが聖だというのはおかしいのではと思うようになっていきました。

（中略）いろいろな自然や聖地に行くと、わたしは何か生き返っていくような気がしていました。教団施設の中で閉じこもり、麻原のことだけを考える修行をすることよりも、こちらのほうがずっと面白く、価値のあることになっていきました。いろいろなところに行くたびに目にする日本古来の信仰についても、もっと知りたいと思いました。その興味は広がるばかりで尽きることはなく、多くの場所を巡礼しては、地元の人にいろいろ尋ね、その土地の信仰の話などを聞くことは、わたしにとってとても楽しいことでした。

（宗形真紀子『二十歳からの20年間』一九一～一九二頁）

すなわち、シヴァ神信仰の世界的広がりや多様性を実感するにつれ、それを麻原崇拜や終末論に局限して理解する方法が次第に相対化されていった、ということになるだろうか。

上祐氏もまた、「聖地巡礼」の過程で、オウム時代とは異なる神観念を獲得していった。2002年には、「21世紀の大黒柱」という神秘的ヴィジョンを受ける。この観念は、以降の数年間に変容を続け、「ひかりの輪」立ち上げ後の2009年には、オウム時代のヒンドゥー

教的シヴァ神からの脱却の象徴、すなわち、「シヴァ神に由来しつつも、シヴァを降伏した仏教の護法神」という位置づけが与えられるようになる（『上高地・乗鞍大黒岳聖地巡礼セミナー・特別教本』二頁。この教本は、現在は使用されていない）。また2006年には、京都・広隆寺の弥勒菩薩像から次のような示唆を受けた。

2006年の3月は、私自身の宗教性に大きく影響を与えることが起こった時期であった。以前から聖徳太子に関心があり、京都や奈良の太子ゆかりの仏閣を巡っていたときのことだ。

広隆寺にあった有名な弥勒菩薩像を見たとき、非常に大きな感銘を受けた。その仏像に、私はかつてないほど神聖なものを感じたのだ。それは、すべての生き物を見守る繊細な智恵、単純に透明なだけではなく、世俗の汚濁も包み込む深みを持った、無限大の慈悲の心だった。

麻原は自らを弥勒菩薩の化身とした。そして、私にその宗教名を与えた。しかし、この弥勒菩薩像は、あらゆる意味で麻原と対称的だった。

麻原は人間であり、性急にも今世紀末に真理の国を作り、自分がそのキリスト（王）になろうとし、教団を武装化して社会と闘争した。

それに対し、弥勒菩薩像は自然の木から作られ、有数の美しさで名高く、1300年の間静かに人々を見守り、私のように時期を得て参拝に来る者を待ち続けていた。寺のアナウンスでは、自己の未完を自覚し、時が来るまで、今後も延々と修行する謙虚な菩薩と位置付けられているとのことだった。

人間と自然、性急と忍耐、傲慢と謙虚、闘争と寂靜。私は、この弥勒菩薩像の発するイメージこそが、麻原の過ちを修正する、真実の弥勒菩薩だと考えた。

この菩薩との出会いは、麻原信仰から脱却する決め手になった。オウム・アレフでは、信者が神聖と感ずるような体験に導けることが、麻原が神の化身である証の一つだった。よって、麻原以外の存在によってオウム以上の体験をもたらされたことが、私が麻原を相対化する大きな力になったのである。（中略）

私は時間をかけて、迷い・恐れを払拭していった。（中略）そこで私が思い至ったことは、こうだった。麻原の下で私たちの犯した過ちがあり、弥勒菩薩像に巡り会ったときに、新しい弥勒菩薩のイメージ、思想が生まれたのだから、麻原を自分とは無関係なものではなく、悪・失敗から善・成功を生むための反面教師と考えればよい、ということだ。

大乘仏教では、聖と邪の両極さえ、まったく別なものではないと説く。私の場合は、麻原の過ちを麻原だけのせいとせず、自分たちの欲求が作り出した面があるものと考え、一生の反面教師として反省を続けてこそ、弥勒菩薩像から感じ取った「真の弥勒菩薩」に近づけると考えた。（上祐史浩『オウム事件 17年目の告白』二一三～二一五頁）

以上のような仕方で上祐氏は、「シヴァ神」や「弥勒菩薩（マイトレーヤ）」に対する意義づけを、オウムにおけるそれから根本的に更新していった。こうした一連の流れは、公安調査庁を始めとする外部の人間からは、オウム時代の信仰から依然として連続性を保つもの（「麻原隠し」と見なされた一方、アレフの主流派からは、教団にとってもっとも重要な麻原への信仰を骨抜きにするもの（「麻原外し」）であると捉えられた。結果として上祐氏は、2003年6月から2004年後半まで「修行」という名目で教団内に幽閉され、アレフ主流派との断絶が決定的となり、2006年にはアレフ脱会を決意するようになる。

「ひかりの輪」の設立以降も、オウムからの完全な脱却を目指した改革は進められていった。その初期においては、上祐氏の体験したヴィジョンに基づき、「大黒天」や「弥勒菩薩」を含む諸神仏が信仰の対象とされたが、個人の神秘体験を過剰に重視するべきではないこと、神聖なものは外部の対象にではなく一人一人の心に存在していることが説かれるようになり、2013年12月に実施された基本理念の改訂においては、特定の崇拝対象を持たない「宗教哲学」的なスタンスで探求を行うこと、また、自己を絶対視せず、「未完の求道者」の心構えを持ち続けることが明記された（「ひかりの輪」基本理念2013年12月17日改正版を参照）。

要約すれば、オウム時代以降の崇拝対象の変遷は、大枠として以下のように整理されるだろう。

麻原彰晃＝シヴァ大神 → シヴァ神 → 大黒天や弥勒菩薩（三仏） → 崇拝対象は持たない

確かに外部の人間からすれば、オウムはあれほどの惨劇を引き起こしたのだから、どうして一挙に麻原信仰から抜け出せないのかと、苛立たしく感じられる点もあるかもしれない。しかしながら教団内においては、先述したように、麻原による終末予言の呪縛、陰謀論の残存、アレフ主流派の反発、宗教的求道心の迷走等の諸要因があり、麻原信仰からの脱却は現実には、暗中模索の状態で一歩一歩なされざるを得なかった。ゆえにわれわれは、経緯の一部を取り出して早急に判断するのではなく、それら一連の経緯の全体を視野に入れた上で、「ひかりの輪」の現状に対する評価や批判を行う必要があると思われる。

（3）人間の魂の行方をコントロールしようとされる「ポア」の技法

次に、第三の要素について簡潔に述べよう。オウム信者は、「墮落した人間」を粛清し、「真理国」を樹立するという麻原の意志に従い、内心に葛藤を抱えながらも、結果的には殺人やテロを遂行してしまった。こうした事態が生じたもう一つの理由としては、麻原が有する「ポア」（「ポワ」とも表記される）の技法によって、死者の魂を高い世界に移し変えることができる、すなわち、たとえ人を殺しても「尊師がポアしてくれる」と思い込んでいたことが挙げられるだろう。

「ポア」とは「人の魂の行方をコントロールする技法」を意味し、こうした観念の直接的な出所もまた、「グルイズム」と同じく、中沢新一の『虹の階梯』にあった。チベット密教では、人が死を迎えると、その心は「中有」（チベット語で「バルド」）と呼ばれる生と死の間状態に入り込み、そこにおいて、次にどのような転生を辿るか、あるいは解脱に至るかということが決定されると考えられている。そしてポアとは、この中有の状態にある魂を操作し、より高い世界に転生するよう移し変える、という技法を指すのである。

『虹の階梯』によれば、ポアには五種類の方法が存在する。そのうちの四つは、自らの魂を操作する技法なのだが、最後の五番目には以下のように、他者の魂を操作する技法について記されている。

五番目は「死者のポワ」である。人の臨終まぎわ、または死者の意識がバルドにある間、瞑想

にたくみでバルドの状態にもよくつうじている密教行者が、死者の意識を追いかけ、つかまえて、悪い生存の状態におちこまないようにするポワである。臨終の床にある人が弱々しく息を吐いて、まだ次の息を吸いこまないうちにこのポワを行えば最も効果的で、その場合にはあまり力のない密教行者によるポワであっても、三悪趣に再生する最悪の事態だけはなんとかまぬかれることができるといわれている。(中略)すでに身体をぬけだしてバルドにある意識にポワを行うためには、死者の意識がバルドのどの状態にあるのかを正確に見ぬく透視力と、その意識をつかまえ、ひきあげられるだけのヨーガの能力とがそなわっていなければならない。そういう行者なりラマなりが身近にいてくれれば、すでに完全な死の状態にある者の意識をポワして、最悪の事態からはまぬかれることができる。

(ケツン・サンポ、中沢新一『虹の階梯』二八二～二八三頁)

オウム真理教に甚大な影響を与えたのは、他者の魂の行方をコントロールしうるとするポアの観念であった。麻原彰晃は、1998年4月の説法において、次のように述べている。

例えば、ここに悪業をなしてる人がいたとしよう。そうするとこの人は生き続けることによって、どうだ善業をなすと思うか、悪業をなすと思うか。そして、この人がもし悪業をなし続けるとしたら、この人の転生はいい転生をすと思うか悪い転生をすと思うか。だとしたらここで、彼の生命をトランスフォームさせてあげること、それによって彼はいったん苦しみの世界に生まれ変わるかもしれないけど、その苦しみの世界が彼にとってはプラスになるかマイナスになるか。プラスになるよね、当然。これがタントラの教えなんだよ。(中略)「この人はこの人で例えば、自己を主張する権限があるんだ」と。で、「すべての魂において生きる権限がある」と。「自己を主張する権限があるんだ」と考えるのが、ヒナヤーナの考え方であると。そして、マハーヤーナの考え方はケースバイケースであると。そして、ヴァジラヤーナの考え方は、そのケースバイケースを解脱者が判断すると。よって、ヴァジラヤーナにはポワという考え方ができたわけだね。

(麻原彰晃『ヴァジラヤーナコース 教学システム教本』第三話)

オウム真理教においては、ヒンドゥー教や仏教に由来する「輪廻転生」や「因果応報」といった観念が、文字通りの実在として捉えられていた。さらにはそこに、優れた密教行者であれば他者の魂をより高い世界に転生させることができるという、『虹の階梯』に描かれた「ポワ」の技法が付加されることにより、人間が生きるべきか死ぬべきか、その「ケースバイケースを解脱者が判断する」、そして「彼の生命をトランスフォームさせてあげる」という、ヴァジラヤーナの教義＝慈悲殺人という観念が形成されたのである。初期の布教の際に強調された「空中浮揚」のように、オウムにおいては、修行の成果として得られる超能力に対する信仰が常に中心的な位置を占め続けたが、なかでも「最終解脱者」である麻原が有すると考えられた「ポワ」の技法は、オウムの犯罪行為に直結するものであったと見なければならぬ。

これに対して、現在の「ひかりの輪」の思想では、あらゆる教えや観念を絶対視しないことが前提とされているため、「輪廻転生」もまた、文字通りの実在としては捉えられていない。それに代えてむしろ、釈迦が示したと言われる「無記」の態度が重視されている。すなわち、世界の無限性や死後の世界の実在など、いくら議論を尽くしても回答が出ない形而上学的問題

に頭を悩ますことより、「苦からの解放」に繋がる事柄を優先するという態度である（『中道の教え、卑屈と怒りの超越 宗教哲学・21世紀の思想』六四頁を参照）。

さらには、オウムで説かれたポアの技法を含め、死後の世界の有り様を安易に実体化し、それによって現世を徒^{いたずら}に軽視する傾向については、次のような批判的記述が見られる。

大乘仏教では、仏教が苦しみの世界とする（私たちが生きている）輪廻の苦界と、絶対の世界とする「涅槃」を区別しない教えがある。また、同じように、輪廻の世界と、仏の集う「仏の浄土」を区別しない教えもある。それぞれを「輪廻即涅槃」、「輪廻即浄土」という。

輪廻と涅槃や、輪廻と仏の浄土は、大乘仏教の唯識思想が説くところでは、本質的に別々の世界ではない。それは、それぞれの人の心（意識と五感）の違いによって、同じ世界が、輪廻・涅槃・仏の浄土といったように、さまざまに違って見える（現れ出してくる）ものである。

この思想は非常に重要で、宗教が対立・闘争する中で抱えている一つの問題が、この現実世界・現世の軽視である。どんな宗教でも、この世以外の世界を認める面がある。しかし、それが行き過ぎれば、この世よりも、あの世の方をずっと重視してしまう場合がある。

すると、オウム真理教のポアのように、「宗教的に対立する他人を殺しても、高い世界に生まれ変わるのだから問題はない」、「現在の悪い社会をハルマゲドンで滅ぼして、その後キリストの千年王国を作る」という発想や、イスラム原理主義のように、「悪い者をやっつけるために自爆テロをすれば、天界に生まれ変わって幸福になれる」といった発想も生じてくる。

これは、本質的には、オウムやイスラムに限らず、あの世を強調する宗教のすべてに当てはまる潜在的な危険性である。例えば、織田信長との対立では、浄土真宗（一向宗）も、信者に対して、「進めば天国、退けば地獄」と説き、織田信長との戦いに立ち向かうことを求めた。

こうして、この世を軽視したり、この世の生を軽視する教えの場合は、それが、宗教的な対立・紛争の際に、他者を殺したり、信者に命の犠牲を求めるなどして、現実世界を破壊し、地獄にしてしまう可能性をはらんでいる。

（『三悟の一元法則、菩提心と六波羅蜜 宗教哲学・21世紀の思想』三六頁）

さまざまな宗教において、来世の实在や死後の裁きについて語られているのは、そこでの報いを担保として、現世における倫理的態度を求めるためであると考えられる。しかしながら、死後の世界の実体化が過剰に進められると、それは現世の軽視という転倒した発想を呼び込むことにもなりかねない。個々の宗教的立場からは反論もあるだろうが、上記の批判的見解は、大枠として妥当であると判断しうるように思われる。

以上、オウムにおける無差別大量殺人に深く関連したと考えられる三点、すなわち、二分法的世界観、グルイズム、ポアという技法について、その概要と、現在の「ひかりの輪」における見解について考察してきた。全体として言えば、「ひかりの輪」においては、過去のオウム

に存在していたさまざまな問題点が適切に反省・考察されているとともに、それらを乗り越えるための新たな宗教観が探究されていると結論することができるだろう。

3. 「ひかりの輪」の思想の総体的性格——ロマン主義的・ニューエイジ的宗教観

2007年の立ち上げ以降、「ひかりの輪」では、かつてオウム真理教が犯した過ちを反省するため、また、オウムから脱却しうる宗教観を確立するため、幾度もの内部改革が遂行されてきた。そのプロセスは現在も進行中であるため、ここで結論めいた事柄を述べるのは適切ではないのだろうが、「ひかりの輪」の宗教思想が総体としてどのような性格を帯びているのか、最後に簡略的な私見を示しておく。

すでに触れたように「ひかりの輪」では、2013年12月に基本理念の改訂が行われ、特定の信仰対象を掲げる「宗教」団体ではないこと、むしろ、さまざまな宗教や宗教思想の他、心理学、物理学などの自然科学、社会学、人類学、国内外の歴史などから積極的に学んでいく「宗教哲学」的態度を基調とすることが明記された。しかしこのことは直ちに、「ひかりの輪」が宗教的スタンスにおいて無色透明・価値中立であることを意味するのだろうか。私にはそうは思われない。なぜなら、同団体における「学び」とは、特定の宗教観に沿う形で行われているからである。その宗教観とはすなわち、「ロマン主義的」あるいは「ニューエイジ的」と称すべき宗教観である。

「ひかりの輪」のHPには、「学び」と「神仏」に関する考え方について、次のように記載されている。

ひかりの輪では、神仏とその尊重の仕方について、新しい思想を提唱しています。

まず、一人一人の中の神聖な意識があり、それを「内側の神仏」と考えます。そして、その神聖な意識を引き出す手段として、外側に「神仏のシンボル」があると考えます。

この外側のシンボルは、仏教徒なら仏陀、キリスト教徒ならイエス・ヤハウェ、イスラム教ならマホメット・アラーといった、特定の人や神・仏などです。

要点は、この外側のものは、一人一人の「内側の神仏」を引き出す「シンボル」ではあっても、それ自体は唯一絶対のものではなく、人に応じて、さまざまな「シンボル」があってもよく、全くシンボルを持たなくても、また同じようによいということです。

この思想は、人の中の神聖な意識（「内側の神仏」）を重視し、従来の宗教が崇拝対象とした外側の存在を「絶対視せず」に、しかし「軽視もしない」で、「神仏のシンボル」として「内側の神仏」を引き出す手段と位置づけています。

そして、両者の合体が、神聖な意識を引き出す＝内側の神仏が目覚めるとするのです。

上記の考え方で特徴的な点は、「神聖な意識」という概念である。すなわち、個々の人間には「神聖な意識」が内在しており、さまざまな神や仏は、それを「引き出す手段」や外的「シンボル」と位置づけられる。そしてそれらは、人によって多様で良い、あるいは無くても良い、とされるのである。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教等、伝統的な一神教の教えを奉じる人々であれば、こうした考え方には、強い違和感や反発を覚えざるを得ないだろう。というのは、一神教によれば、

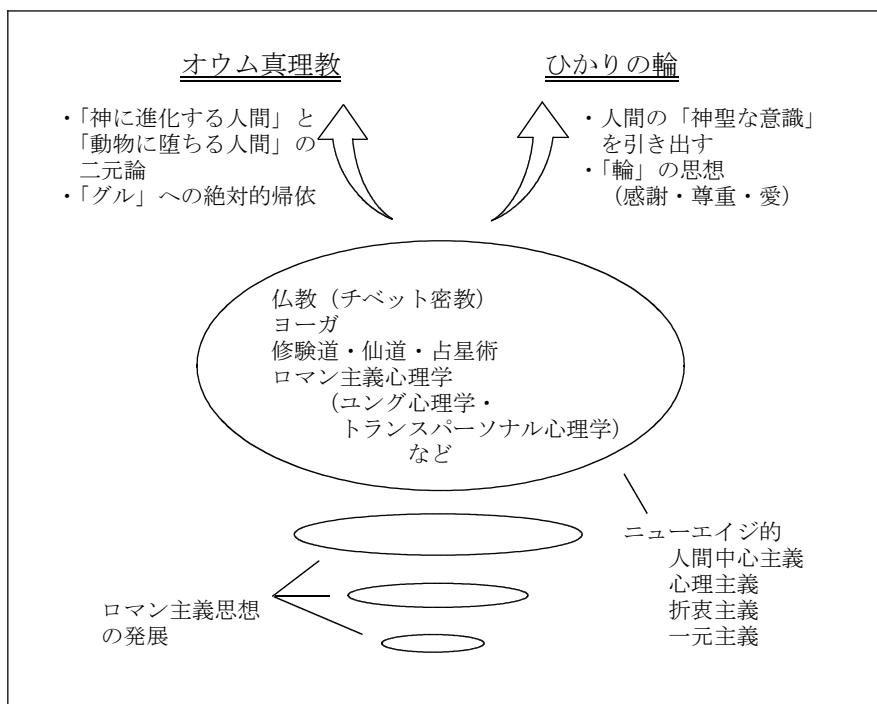
人間はあくまで神の「被造物」であり、人間に対して何らかの神聖性を認めることや、神を単なる「シンボル」と見なすことは、その教えに根本的に反しているからである。また、上記の考え方は、仏教の教えに近いようにも思われるが、完全に同じであるとも言えない。同HPの「「ひかりの輪」の基本的性格」においては、「一人一人が持っている神聖な意識とは、分かりやすい言葉で言えば、万人・万物への愛ということが出来ますし、仏教的な表現を借りれば、慈悲とか、仏性ということになります」と記されているが、神聖な意識、内側の神仏、万人・万物への愛、慈悲、仏性などの諸概念を等し並みに同一視する仏教の宗派は、厳密に言えば存在しないだろう。

「ひかりの輪」は上記の考え方を「新しい思想」と称しているが、私の知る限りでは、こうした宗教観は必ずしも新しいものと言うことはできない。拙著『オウム真理教の精神史』（四八頁以下）でも論じたことだが、その原型は、19世紀前半のドイツを中心に興隆した「ロマン主義」にある。プロテスタントの思想家フリードリヒ・シュライアマハーの『宗教について』（1799）という著作に典型例を見ることができるよう、ロマン主義の宗教論においては、個々人の心情の内部にこそ、宗教固有の領域があると主張された。そして宗教の本質は、精神的宇宙との接触によって得られる「聖なる感情」において表出すると説かれたのである。同時にシュライアマハーは、教義や教典、位階制度といったものは宗教の外面に過ぎず、「聖なる感情」は個々人によって多様であること、また、そうした感情を深く理解するために、キリスト教のみならず、世界中のさまざまな宗教から学んでいくべきことを説いたのであった。

宗教の本質が個人の心のなかに内在しており、それを掘り起こすために古今東西の宗教から学ぶというロマン主義的宗教論の枠組みは、その後、ウィリアム・ジェイムズ、ルドルフ・オットー、カール・グスタフ・ユングといった論者たちによって展開させられていった。そして第二次世界大戦が終わり、20世紀後半を迎えると、その流れはアメリカ西海岸に伝播し、「ニューエイジ」と称される運動として、広くポピュラリティを獲得するようになる。島菌進『精神世界のゆくえ』（東京堂出版、1996年、三一～三三頁）によれば、ニューエイジ思想の特徴は、次の七点に整理される。すなわち、（1）自己変容あるいは霊性的覚醒の体験による自己実現。（2）宇宙や自然の聖性、またそれと本来的自己の一体性の認識。（3）感性・神秘性の尊重。（4）自己変容は癒しと環境の変化をもたらす。（5）死後の生への関心。（6）旧来の宗教や近代合理主義から霊性／科学の統合へ。（7）エコロジーや女性原理の尊重。

このように、ロマン主義やニューエイジの思想は、自己の内面に霊性や神聖性が存在すると想定し、それを覚醒させるために、自然や宇宙、そして諸宗教や諸科学の叡知を積極的に活用しようとする。そしてその思想は、多様な分野から「霊性的覚醒」に役立つと思われる要素を抽出してくるという点で、著しい「折衷性」を帯びることになる。ニューエイジにおいて重視された分野を列挙すれば、仏教やヨーガの瞑想修行、修験道・風水・仙道・占星術等を含む自然哲学、古今東西の神秘主義、宗教と科学の統合を目指したニューサイエンス、ユング心理学やトランスパーソナル心理学を始めとするロマン主義心理学、等が挙げられるだろう。

個々人のなかに「神聖な意識」が内在しており、それを引き出すために「学び」を行うという「ひかりの輪」の姿勢は、先述の通り、濃厚なロマン主義的・ニューエイジ的傾向を帯びていると私には思われる。そして、実はこうした思想的特徴は、オウム真理教にも認められるものであった。また、生きて現存している人間に対して何らかの神聖性を認めるというその考え



方こそが、オウムの「超人類」の観念を形成させる萌芽となったのではないだろうか。本稿で述べてきたように「ひかりの輪」では、オウムを脱却するための改革が繰り返され、結果として、かつてのオウムに内在していたような直接的危険性を除去するということはすでに達成しているのだが、もっとも基礎的な宗教観のレベルでは、オウムと共通する要素

を残しているというのが、妥当な見方であるように思われる（オウム真理教と「ひかりの輪」を含む思想的な流れを簡略的に図式化すると、上の図のようになる）。

同時に私には、現在の「ひかりの輪」で唱えられている一元論が、オウムの二元論を根本的に超克しうるものであるとも思えない。一元論は、すべてのものを単一の原理のなかに包摂しようとするが、そうした包摂を拒む要素や個人が現れることにより、不可避的に二元論的構図へと変容していく。具体的に言えば、例えば私自身は、「ひかりの輪」が主張するように、すべての人間のなかに「神聖な意識」が存在するとは思わないし（少なくとも私のなかに、そのような意識は存在しない）、また、現実においても理念においても、「万人・万物が繋がって一体である」とも考えない。ゆえに、私自身の立場や見解は、「ひかりの輪」の一元論の内部には包摂されないということになる。

以上のように、こうした種類の一元論は事実上、それに賛同する者と賛同しない者に、人間を二分化させてしまう。オウム真理教を含め、ニューエイジ系の新宗教の多くは、当初は一元論的な理想論やユートピア論を提唱するものの、現実を前にして不同意や挫折に突き当たり、次第に二元論へと変質していくことになった。こうした意味で、一元論と二元論は、実はコインの表裏のように不可分の関係にあると見るべきではないだろうか。

宗教学を専攻する一研究者として私が期待するのは、簡潔に言えば、ロマン主義的・ニューエイジ的宗教観に対し、拙速に妥当性や真実性を認めるのではなく、それを歴史的に相対化して捉える視点を身に付けてほしい、ということである。しかしこの場合、結論を急ぎすぎているのは、むしろ私の方なのかもしれない。今回の意見書の作成に当たって、「ひかりの輪」の来歴を振り返り、改めて痛感したのは、同団体がきわめて厳しい条件——具体的には、周辺住民や国民からの根強い反感、アレフ主流派との対立、被害者賠償の責務、会員の健康不振や高齢化等——をいくつも抱えながら、オウム問題の解決に向けて暗中模索の歩みを続けてきたということであった。『a t プラス』における上祐氏との対談時にも述べたように、オウム問題

の解決という責務は、「ひかりの輪」のみで背負いきれるものではないし、背負わせて良いものでもない。その責務は、私を含め、より多くの外部の人間たちによって積極的に担われるべきだろう。今後も変化を続けるであろう「ひかりの輪」に対し、私自身も一人の対話者として、その「学び」の一端に加わりたいと考えている。そして、団体規制法に基づく「ひかりの輪」への観察処分が、オウム事件を真摯に反省し、外部に開かれていこうとする同団体の動きを阻害するものであってはならないということを、最後に付言しておきたい。